

学習不安・登校不安を薄め、学校復帰を果たした取組

《概要》

- 当該生徒は、中学校第1学年の夏休み、体調不良がきっかけで、2学期以降欠席が続いた。
- その後、当該生徒は登校支援室への通級を始めたが、継続しなかったことから、自宅への訪問指導とした。第2学年から学校に戻りたいという当該生徒の気持ちを確認し、学習進度に沿った指導や不安の解消に努めた。その結果、当該生徒は、第2学年4月から学校復帰を果たした。
- 保護者、学級担任、登校支援室職員の三者の連携のもと、当該生徒は、訪問指導により、これまで活用していた通信教材に取り組んだり、重点教科の習熟を図ったりした。

《相談・支援等の実際》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○訪問指導による 学校の学習進度に沿った指導 (第1学年9～10月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当該生徒は、週に一度程度、午後からの通級だった。体調不良で通級が難しいことから、アウトリーチ型支援（訪問指導）とした。 ・ 学校の学習進度に沿って、当該生徒が望む通信教材のテキストを活用した。 ・ 不登校になって以降、学級担任は週1回の家庭訪問を継続しており、良好な関係を築いていた。
<ul style="list-style-type: none"> ○三者の連携による 当該生徒の学習や登校への不安の解消 (第1学年1～2月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 冬季休業中に、保護者、学級担任、登校支援室職員の三者で面談を行い、当該生徒の進級後は登校したいとの意志を尊重することを確認した。 ・ 当該生徒の学習への不安解消のため、重点教科の習熟を図るなど、学習に一層の力を入れた。 ・ 学校は、スモールステップにより段階的な受け入れ体制を構築した。
<ul style="list-style-type: none"> ○校長室登校による 学校復帰 (第2学年4月～) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新学期になり、当該生徒は登校を始め、はじめのうちは遅刻、早退が多く、校長室で学習したが、徐々に登校回数が増え、登校時刻も早まり在校時間も長くなった。 ・ 2学期になり、友達との交流が増え、宿泊研修に参加することができた。また、始業から終業まで在校できるようになった。

《取組の成果》

- 保護者、学校、登校支援室の三者が、当該生徒の気持ちを尊重し、話し合いの上、学校復帰に向け連携した取組を進めることができた。
- 保護者に訪問指導を提案することにより、当該生徒の学習不安を解消できた。
- 学習進度に合わせた内容にするとともに、次第に教科を絞ったことにより、当該生徒の学習に対する自信をもたせることができた。

学校復帰に向けた取組

《 概要 》

- 当該児童は、小学校第3学年になって、児童間のトラブルをきっかけに不登校となった。
- 当該児童は、大勢の人がいる場所への不安感が強いことから、学校や保護者と連携を強化し、学習面での個別の対応と当該児童のペースを大事にした指導・支援を行いながら、精神的な安定を図った。
- 国語・算数を中心とした個別の学習、特技を伸ばす作業活動、自分の趣味を生かした取組、適応指導教室と学校との情報交流の強化、学級担任や保護者との面談などを行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
<p>○いつでも学校復帰できる学力を付ける 国語・算数を中心とした個別の学習</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語と算数で個別の学習を行いながら、基礎学力の定着を図った。 ・ 学校からのプリントやドリルを活用して、学校の学習進度を意識した指導を心掛けた。 ・ 社会・理科・音楽の学習を適宜行った。
<p>○精神的な不安定を解消し安定させる取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当該児童のペースに合わせてながら、徐々に1単位時間45分の学習を行った。 ・ ゲームなどのレクを通して交流を図った。 ・ 絵を描くことが好きなど、趣味の時間を確保した。 ・ 農園作業や調理実習を通して、作業することの楽しさを味わわせた。
<p>○学校や保護者との連携強化による情報の共有</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校には、適応指導教室から「個別の指導票」と「通級状況」で当該児童の様子を伝えた。学校からは学級通信と時間割を送ってもらい、学級の様子と学習の進度を当該児童と確認した。 ・ 学級担任や保護者との面談を年に2～3回実施した。 ・ 登校した時は、学校から「登校状況」の手紙を送付してもらった。

《 取組の成果 》

- 国語の音読や算数の計算を中心に学習に対する自信が付いた。
- 絵を描くことなど自分の好きなことにじっくり取り組むことによって精神的に安定した。
- 第4学年になって、1学期に得意な授業への参加を皮切りに、少しずつ登校するようになり、9月からは毎日登校できるようになった。

生徒の学習意欲を引き出した学びの支援

《 概要 》

- 当該生徒は、中学校第1学年の時に、生徒間のトラブルがきっかけで学級に行きづらくなり、別室登校をしたが徐々に学校へ登校しなくなった。
- 学習の遅れと学校への抵抗感を解消したいという生徒及び保護者の意向から教育支援教室（適応指導教室）に入級した。当該生徒に学ぶ楽しさを再認識させるとともに、当該生徒の取組状況について保護者・学校・教育支援教室で情報共有を図った。
- 当該生徒の学習状況の確認や興味・関心の高い教科を中心に学習を進めながら、学校復帰の時期を検討した。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○ 学ぶ楽しさの再認識

○ 保護者・学校・教育支援教室による情報共有

相談・支援、取組等の状況

- ・ 教育支援教室において、当該生徒の学習状況の確認や興味・関心の高い教科（数学）を把握し、できるところからできる範囲で学習に取り組むよう指導した。
- ・ 教育支援教室指導員が当該生徒に学習を強制することなく、当該生徒の学習意欲を少しずつ伸ばすよう地道に取り組んだ。
- ・ その結果、当該生徒は、学習の遅れと学習意欲を徐々に取り戻すことができ、登校復帰の足がかりとなった。
- ・ 学校と当該生徒及び保護者の関係は良好であったため、学級担任への情報提供や、教育支援教室への見学受け入れを行い、当該生徒の取組状況を共有できた。
- ・ 当該生徒及び保護者・学校・教育支援教室で情報共有を図ったことで、学校復帰の時期を的確に見極めることができ、徐々に登校ができるようになっていった。

《 取組の成果 》

- 当該生徒の状況を的確に把握することで、当該生徒は学習意欲を取り戻し、学習の遅れを改善することができた。
- 保護者や学校と連携することで、当該生徒の学校復帰への時期を的確に見極めることができ、現段階での円滑な学校復帰を促すことができた。

安心する居場所づくりと学びの場をめざして

《 概要 》

- 児童生徒に、急な学校・生活環境の変化により、不登校又は学級内での落ち着かない行動などの事例がみられたことから、令和元年4月に適応指導教室「ふぁーがす」を開設した。
- 児童生徒の様々なニーズに対応できる環境を整備するとともに、他施設を活用したり、学校との連携を深めたりするなどの支援の充実に図った。
- 3名の指導員を確保し、児童生徒の体力づくりや社会性の育成、学校と連携を図った学習等の支援を行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○様々なニーズに対応できる環境づくり

○他施設の活用や他者との触れ合いをとおり社会性の育成

○児童生徒の学習意欲を高めるための学校との連携

相談・支援、取組等の状況

- ・ 小規模、少人数の教室であるが、指導員は補助員との2名体制（教員免許状又は保育士免許状を保有している3名によるシフト体制）とし、情報共有しながら複数体制で関わり、通級しやすい環境づくりを行った。
- ・ 1日に1コマは、運動する時間を設け、体力づくりを行った。
- ・ 希望する児童生徒には、スクールカウンセラーの面談を実施した。
- ・ 教室内だけの活動に加え、隣接する総合体育館や図書館を活用したり、散歩などの野外活動を定期的実施したりしたことにより、他者との関わりが図られた。
- ・ 学校で中間・期末テストを受けるよう生徒に促し、実際に取り組むことができたことで、自信をもつことができた。
- ・ 高校入試に向けて1月と2月には、中学校教員が適応指導教室を訪れ、各教科2時間程度の指導を行った。
- ・ 指導員は、3か月ごとに学級担任と面談し、児童生徒に合わせた学習等の支援を行うことができた。

《 取組の成果 》

- 家庭だけの生活や別室登校での教員との関わりのみだった児童生徒が、本教室の職員との結び付きにより、他者と関わりをもつ機会を増やすことができた。
- 通級した児童生徒の中学校への進学、高校受験への意欲を高めることができた。
- 学校と連携し、通級を出席扱いとすることにより、自信をもたせることができた。

家庭・学校と連携して学校復帰を目指した支援

《 概要 》

- 小学校第6学年より登校支援を開始するが、中学校第3学年より学業不振、生活習慣の乱れから不登校になる。また、親子関係の改善に学級担任が仲裁に入ることが多くなった。
- 当該生徒の自己決定の場面を設定し、生活習慣の確立や基礎学力の向上を図った。
- 学校行事等には事前学習の段階から参加できるよう登校を働きかけ、自学自習を基本としながら学習支援員の個別指導を行い、小グループのリーダーとしての責任と自覚を持たせた。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○ 生活リズムの改善と継続的な通室

○ 基礎学力の定着

○ 自己肯定感の育成

相談・支援、取組等の状況

- ・ 家庭・学校と連携して昼夜逆転した生活習慣の改善を図った。
- ・ 当該校の主幹教諭及び学級担任と連携し、学校行事等への事前学習からの参加や定期テストの学校での受検により、適応指導教室から学校へのスムーズな移行を図った。
- ・ 当該生徒の社会性等を育む体験活動を重視し通室意欲を喚起した。
- ・ 基礎学力の向上を目指した自主的な学習と苦手教科の克服のための学習支援員による指導（小グループ・個別）を行った。
- ・ 定期テストなどの前には、テスト範囲を意識した学習に取り組むよう働きかけた。
- ・ 当該生徒が課題意識や目標をもって学習に取り組むように促した。
- ・ 適応指導教室での朝の会・帰りの会の進行や、ニュース発表に取り組む姿勢など本人の良さに気付かせ、当該生徒の自尊感情を高めた。
- ・ 訪問アドバイザーや学習支援員による、きめ細やかな教育相談を行った。

《 取組の成果 》

- 生活リズムが改善され、入室・登校の割合が90%以上になった。
- 定期テストや学校行事への参加に関わることで登校できるようになった。
- 自分の良さに気付き、適応指導教室ではリーダー的な存在になり、教室の雰囲気づくりに積極的になった。
- 希望する進路の実現に向けて、意欲的に学習に取り組む様子が見られるようになってきた。

生活リズムを取り戻し、人と関わり、そして復帰へ

《 概要 》

- 当該生徒（中学校第2学年）は、本市に第1学年時に転居し、第2学年になってから、人間関係が原因で不登校になった。
- 生活リズムを取り戻させると同時にこれまでの自分を見つめ直し、父親以外の人と関わる体験を積み重ね、当該生徒の学校復帰を目指した。
- 生活リズムの回復、集団生活への適応、学習習慣の定着の3つの取組を柱として当該生徒を支援した。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
○ 生活リズムの回復	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当該生徒に、毎日決まった時間に起床し、朝食をとり、適応指導教室に通うことを習慣化させることで、生活リズムを回復できるよう支援した。 ・ 毎日の自学自習の時間では、学習計画に基づき、学習に取り組むことができた。
○ 集団生活への適応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「集団生活への適応力の育成」をねらいとした午後のプログラムでは、「軽スポーツ」の時間には主に卓球、「全員交流」の時間にはボッチャや百人一首等、人と関わる活動に取り組んだ。 ・ 放課後も公共交通機関の時間まで残って、卓球やカードゲームを楽しむ姿が見られた。
○ 学習習慣の定着	<ul style="list-style-type: none"> ・ 午前中の自学自習の時間では、学校で使用している教科書・ワーク等を使い、自分で決めた教科の学習に取り組んだ。 ・ 指導員は学習状況を観察しながら個別支援を行った。 ・ 定期テストや学力テスト等は、学校と連携しながら適応指導教室で行うことができた。

《 取組の成果 》

- 在籍期間、毎日無遅刻無欠席で通級し、登級後は適応指導教室のプログラムに即した行動ができるようになり、生活リズムを取り戻し、学校復帰が可能な状況になった。
- 適応指導教室という限られた児童生徒の中ではあるが、集団生活の中で、級友と談笑したり、協力して様々な活動に取り組んだりする体験を積み重ねることができた。
- 生活リズムの回復、同世代の児童生徒や適応指導教室の指導員と関わる体験など、限られた時間や内容ではあるが、集団活動に取り組んだことが学校復帰につながった。

自己肯定感を高め、社会的な自立を目指す支援

《 概要 》

- 令和元年度（2019年度）の不登校出現率は、小学校1.2%、中学校2.6%である。
町子育て支援課や児童民生委員、児童相談所等と情報を共有したり、連携を図ったりしながら改善に向けて取り組んでいる。
- 社会的な自立を目指し必要な資質・能力を身に付ける。
- 「共感的な理解による適切な相談支援」、「現状や実態に合った学習支援」、「学校との連携」、「保護者との協力関係」、「関係機関との連携」、「不登校の積極的な改善」に取り組む。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 共感的な理解による適切な相談支援

- 現状や実態に合った学習支援

- 学校との連携、関係機関との連携

相談・支援、取組等の状況

- ・ 児童生徒の訪問相談や来所相談など、「個別教育相談」を行っている。
 - ・ 保護者の来所相談を行っている。
 - ・ 教員の教育相談・支援を行い、「在籍校への指導・助言」を行っている。
- 
- ・ 支援センターでの教科等の学習指導を行い、個別支援や小集団活動を行っている。また、教科等の学習指導や、運動等の体験的な活動を行っている。
 - ・ 学習時にPC等による調べ学習を行っている。
 - ・ 家庭訪問による課題配付など、訪問型の学習支援を行っている。
- ・ 年2回、不登校対策会議を行っている。
 - ・ 年1回、学校訪問（定期訪問、臨時訪問）を行っている。
 - ・ ケース会議を学校、町、民生委員、児童相談所等が連携を図り適宜行っている。

《 取組の成果 》

- 保護者が見通しをもち、安心感を高められるよう関わることで、児童生徒が落ち着いて自分と向き合えるようになった。
- 一人一人の個性を大切に受け止め、自ら考え、判断する機会を適切に取り入れることで、自信を取り戻し主体性が向上した。
- 家庭の協力を受けながら、学校やSSWが効果的な刺激を与えることで、登校できる日が増えた。

逆風張帆 ～逆境を前に進む糧とするために～

《概要》

- 令和元年度（2019年度）の不登校出現率は、小学校 0.05%、中学校 2.79%であり、大幅な増加傾向にない。
- 本市の適応指導教室は、不登校及び集団不適応児童生徒の将来の社会的自立のための学校復帰を目指し、学校・家庭・保護者と適応指導教室が連携を密にし、適切な支援を行っている。
- 各学校の不登校・いじめ等の取組及び成果・課題についての実践交流、不登校児童生徒への対策の交流、不登校児童生徒を対象とした登山体験や陶芸体験に取り組んでいる。

《相談・支援等の実際》

目標・方向性

- 学校との情報共有とスモールステップによる意欲化

- チームとしての対応力向上

相談・支援、取組等の状況

- ・ 指導時間において、当該生徒とのリスニングや対話で、前向きな考え方を引き出し、学校に情報提供することにより、学校が当該生徒に働きかけるきっかけとした。
- ・ 当該生徒へのカウンセリングを通して、日常における時間の使い方に目を向けさせ、食事や睡眠等の基本的習慣を見直し、生活リズムの改善が図られた。新学年・新学期等において、学校と連携し、別室登校、放課後登校等を働きかけた。
- ・ 全教職員を対象に、市の教育研究会と共催で、年1回、講師を招聘して、児童生徒の心に寄り添う共感力や自己肯定感を育む指導力を高めることを目的として、不登校やいじめ等に係る研修会を開催した。
- ・ 年4回の組織的な実践交流や対策交流を開催し、他校の実践を活用してチーム力向上を図った。また、市内の管理職や臨床心理士等に講師を依頼し、不登校に係る実践や児童生徒への寄り添い方等についての講話を開催した。

《取組の成果》

- 適応指導教室は平成20年から44名、陶芸体験は平成24年から46名、登山体験は平成28年から11名の通級者・参加者であり、適応指導教室の通級者や登山体験や陶芸体験の参加者は、自己肯定感が高まり、登校意欲につながった。
- 年2回の学校訪問の際、訪問前に具体的な視点を提示して実践資料の提出・説明を求めたことにより、取組内容に質の高まりが見られた。

「不登校児童生徒サポートハウス」フェニックスの活動

《 概要 》

- 令和2年（2020年）3月末現在の、在籍児童生徒に占める不登校割合は、市全体で1.53%となっている。
- スクールソーシャルワーカーが中心となり、教職員や関係機関と情報共有し、児童生徒の状態や不登校に至る背景及び原因を探り、課題解決を図った。
- 不登校児童生徒の学校復帰に向けた対応を行うことを目的とした、不登校児童生徒サポートハウスを週3日程度開催した。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○ 教職員や関係機関との情報共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スクールソーシャルワーカーが定期的に学校訪問するなど巡回相談を行った。 ・ スクールソーシャルワーカーが不登校児童生徒及び保護者と面談や電話相談を受けるなどの支援体制を構築している。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校復帰に向けた対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「不登校児童生徒サポートハウス」に児童生徒が通うことにより、不登校児童生徒の居場所を確保することができた。 ・ 問題を抱える不登校児童生徒等が在籍する学校へスクールソーシャルワーカーが訪問し、学校と連携を図りながら教育相談を行った。

《 取組の成果 》

- スクールソーシャルワーカーの教育相談等により、学校に登校することができない児童生徒を「不登校児童生徒サポートハウス」につなげることができた。
- 「不登校児童生徒サポートハウス」に不登校児童生徒が通うことにより、自宅に引きこもることなく、他の不登校児童生徒と交流することができた。
- 中学校では学校に復帰することはできなかった生徒が、高等学校へ進学後は居場所を見つけ、毎日通学しているケースも見られた。

心の居場所をつくる適応指導教室（やすらぎ学級）

《 概要 》

- 本市における不登校児童生徒の数は増加傾向にある。要因は様々であるが、昼夜逆転になり生活リズムが乱れていることや、学校という大人数の中で過ごすことができない児童生徒が増えていると考えられる。
- そこで、個々の児童生徒のニーズに合わせた支援、人間関係づくりの支援及び生活リズムの改善と学習支援の充実を目指した。
- 特に関係機関との連携、来所日の決定、意図的なコミュニケーション活動の設定及び生活リズムチェック表による振り返りの可視化と学習教科の自己選択を行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性	相談・支援、取組等の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○ 個々の児童生徒のニーズに合わせた支援の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導主事と指導員が、学校やこころの相談員との教育相談の内容等について打合せを毎朝行い、個々の児童生徒の情報を共有した。 ・ 共有した情報、現在の状況や希望に応じて、継続して通うことができる日及び時間帯を設定した。 ・ 保護者や児童生徒本人との相談機会を設け、共通理解を図った。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 人間関係づくりの支援の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導員と対話したり活動したりする場面を意図的に設け、人間関係づくりに努めた。 ・ 自らの日常生活に関する出来事の中から自己決定する機会をつくり、自分の行動に自信をもてるようにした。 ・ レクリエーションや散策活動、花壇の整備など集団での活動を設け、様々な場面で人との関わりを図った。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生活リズムの改善と学習支援の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活リズムチェック表により、毎日の自分の生活状況を可視化させるとともに、指導員が励ましたりアドバイスしたりした。 ・ 個々の学習は、興味や理解の程度に応じて学習教科を選択させた。 ・ 定期テストや実力テストを適応指導教室で受けることができるよう、体制を整備した。

《 取組の成果 》

- 個々の児童生徒のニーズと情報共有を基に、来所する日や時間帯を設定することで、継続して通うことができる児童生徒が増えてきた。
- 人間関係づくりの視点から集団での活動を意図的に行うことで、指導員との充実したやり取りや他者を思う気持ちへとつながり、適応指導教室を心の居場所とする児童生徒が増えた。
- 生活リズムチェック表を活用し、生活リズムを可視化することで、自分の生活を改善しようとする児童生徒が見られた。また、学習する内容を自己決定し、進んで取り組む様子が見られた。

チャレンジ登校から学習意欲の向上につながった事例

《 概要 》

- 当該生徒は、中学校第2学年の9月から「教室に入れない」という相談でマイウェイ（適応指導教室）に来室し、通級を開始した。
- 当該生徒の修学旅行に参加したいという目標を実現させるため、人との関わりへの不安を軽減することを目指した。
- 教室内の周りの生徒と体験活動を行うことで他の生徒と関わる機会を設けた。また、少しずつ学校に慣れるため、特定の教科等や時間に登校するチャレンジ登校を行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

- 小集団活動を通し、人間関係づくりをポイントにした取組
- 修学旅行に参加するためチャレンジ登校を開始
- 希望する進路の実現

相談・支援、取組等の状況

- ・ 小学校第6学年から不登校傾向にあったが、中学校第2学年の9月に教育相談を行い、マイウェイへ通級し始めた。
- ・ 運動は苦手だったが、体力づくりや、ボランティア活動（ごみ拾い）、調理実習などを通して他者との交流を図ったりした。
- ・ 体験活動（函館美術館見学）に参加することができた。
- ・ 当該生徒の修学旅行への参加希望を受け、総合的な学習の時間にチャレンジ登校を始め、少しずつ学校、学級に慣れ、ほぼ欠席せずに登校できるようになった。
- ・ 修学旅行では、仲間との思い出を作ることができたが、10月下旬から、再度マイウェイへ通級することになった。
- ・ 卒業に当たり、希望する進路を実現するため、毎週金曜日の放課後にチャレンジ登校を行い、学習プリントやワーク類を提出し、学校でテストを受けるなど学習意欲が高まり、再登校することが増えてきた。

《 取組の成果 》

- マイウェイへ通級しながら、同学年や異学年の生徒と関わり、良好な人間関係を維持し、様々な活動に取り組めるようになった。
- チャレンジ登校を重ねることで、登校意欲・学習意欲につながった。
- 毎週、学級担任と情報交換をすることで当該生徒の気持ちや体調を把握することができ、当該生徒の登校又は通級の選択をすることができた。

「学ぶ機会」の保障

《概要》

- 当該生徒は、現在中学校第3学年であるが、小学校第3学年ごろから集団に適応できなくなり、午前のみ登校し、個別学習を行った。
- 服装へのこだわりが強く、音や匂いなど感覚過敏が見られ、本人が中学校で学習することに困難を感じたことから、適応指導教室へ通級し、学習環境を整備するとともに、学校と適応指導教室の連携及び進路指導を行った。
- 適応指導教室と学校が連携を図り、学習支援を充実させ、卒業後の進路決定についても協議を行った。

《相談・支援等の実際》

目標・方向性

- 居場所の確保及び学びの機会、場の充実
- 学校との連携及び学習環境の整備
- 学校との連携による進路指導

相談・支援、取組等の状況

- ・ 中学校入学の際、町内のフリースクールから適応指導教室に通級することとなり、入学式当日から通級した。午前だけの通級の予定であったが、午後からも通級し、熱心に学習に取り組んだ結果、定期テストでは、成績が良好だった。その後、体調不良で、2ヵ月ほど適応指導教室を欠席した。
- ・ 中学校第2学年では、学級担任と保護者との話合いで、週1回午前中のみ学校へ登校することとし、ほとんど休まず通級した。インターネットを利用して学習したり、学校から提供された動画学習やテレビ教材を活用したりして、学習を進めた。
- ・ 学年後半は、体調不良や新型コロナウイルスの感染拡大防止による臨時休業で、通級できなかった。
- ・ 中学校第3学年から週2回の学校への登校となった。
- ・ 学級担任との三者面談や進路指導により進路が明確となるなど、学級担任の粘り強い支援の成果が見られた。

《取組の成果》

- 適応指導教室への通級及び当該生徒の学習への主体性を喚起したことで学習活動が安定し、「学ぶ機会」を保障することができた。
- 家族による当該生徒への寄り添い方が温かく、手厚い支援が得られたことから、通級及び登校への協力、学校との連携や情報共有などを効果的に行うことができた。
- 学校への指導員の定期的な訪問で、学校との連携・協力などが継続でき、情報共有を図るとともに適切な支援を行うことができた。

継続した取組で自信をもち、通室回数が増えた事例

《 概要 》

- 当該児童は、小学校第3学年の5月から適応指導教室への通室を開始し、現在は、週3回、適応指導教室に通室している。
- 段階的に学習内容を発展させるとともに、継続して課題に取り組ませることにより、自信をもって学習したり、家族以外の人と接したりすることができるようになることを目指した。
- 学習面では、反復練習等を中心にした課題、体力面では、他の通室生と一緒に運動の技能等の向上に向けた取組を実施したことにより、学習への自信や対人関係の広がり構築できるようにした。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○目標や方向性1
学習に対する自信と達成感

○目標や方向性2
運動の技能向上と対人関係の広がり

相談・支援、取組等の状況

- ・ 当初は、母親の付添が必要だったが、徐々に滞在時間が長くなり、課題に集中して取り組むようになった。
- ・ 書字指導においては、平仮名、片仮名、濁音、拗音、促音などを毎回ノートに練習してから、簡単な文章を書くようにした。
- ・ 第5学年から、土日の出来事を日記に書くという課題にしたところ、会話が増え、意欲的に学習に取り組むようになった。
- ・ かけ算九九表を使ったマス計算や一桁の100マス足し算では、終了までの時間やプリントの枚数を評価し、自信につなげている。
- ・ 運動不足と体重増加から、疲れて動けなくなることが多かったが、回を重ねるごとに連続して運動できるようになってきた。
- ・ 週3回の通室のうち、1回は学習、2回は運動というパターンができあがり、1週間の生活にメリハリが生まれてきている。
- ・ 継続して運動に取り組んだ結果、バドミントンの技術が向上し、本人の自信につながっている。
- ・ 他の通室生などと一緒に、ドッジビーやバドミントンを楽しむことができるようになった。

《 取組の成果 》

- 適応指導教室における活動が明確であるため、自ら進んで国語や算数の課題に取り組み、30分から1時間、学習室で指導員と机に向かうことができるようになった。
- バドミントンに自信をもち、中学生や教師などとゲームをしたり、バドミントンの経験者である母親と対戦したりするなど、積極的な様子が見られるようになった。
- 小学校を訪れ、教職員に会ったり卒業関係の写真撮影をしたりすることにより、「卒業証書の授与は校長室で行ってほしい」と、自分の希望を学校長に直接伝えることができた。

傾聴を重視した支援を通して再登校に結び付いた事例

《 概要 》

- 当該生徒は、中学校第3学年の生徒であり、自分に自信がもてず、同級生との関わり不安がある。第2学年の秋頃から不登校傾向となり、同年の冬に適応指導教室に入室した。
- 自分に自信をもたせ、対人面や学習面での不安を解消するため、自己肯定感を涵養したり、学習面の遅れを取り戻したりすることにより、学校復帰を目指した。
- 教育相談において傾聴を重視し、助言や励ましを行うとともに、進路実現に向けて、個に応じた学習支援を丁寧に行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○目標や方向性1
自己肯定感の涵養

○目標や方向性2
学習面における不安の解消

相談・支援、取組等の状況

- ・ 当該生徒は同年代の生徒へ声掛けなどをする際、ためらいや迷いが多く見られたため、教育相談において当該生徒の思いを傾聴するとともに、友人への声掛け等の具体例を挙げて助言を行った。
- ・ 指導員は当該生徒の課題等を共有し、当該生徒が同年代の生徒と安心して関わられるよう、様々な活動場面において複数の目で見守り、励ますなどして当該生徒の気持ちに寄り添うよう心掛けた。
- ・ 当該生徒の卒業後の進路相談を行い、家庭や学校との連携を大切にしながら、進路実現に向けた助言を行った。
- ・ 当該生徒に対する教育相談を定期的実施し、当該生徒の学習面での不安を傾聴するとともに、精神面の安定を図った。
- ・ 当該生徒への学習面の支援では、問題集や「あさひかわ春の学び場」などの教材を活用し、主に下学年の復習を丁寧に行った。
- ・ 当該生徒が在籍する中学校と連携を図り、中学校で実施した定期試験問題を教材として活用し、適応指導教室において指導員と復習を行うなど、進路実現に向けた学習支援を行った。

《 取組の成果 》

- 教育相談において、当該生徒の気持ちの傾聴を大切にしたことにより、当該生徒は次第に表情が明るくなり、少しずつではあるが自発的な行動が見られるようになった。
- 当該生徒にとって適応指導教室が安心できる居場所となり、少しずつ同年代との交友関係が広がるとともに、学習支援を通して自信をもつことができ、学校復帰への意欲の高まりが見られた。
- 当該生徒は、中学校第3学年の秋頃から適応指導教室に通室せず、ほぼ毎日、在籍する中学校に別室登校することができるようになった。

「主体性の尊重」・「心の居場所づくり」を柱とした個別指導

《 概要 》

- 当該生徒は、小学校高学年時に体調不良で休みがちになり、中学校入学後に不登校となった。
- 「主体性の尊重」「心の居場所づくり」を柱に、「基本的な生活習慣の改善」「基礎学力の定着」「豊かな情操・社会性の育成」の3つを支援の目標として設定した。
- 通室日を予約制とし、一週間の適応指導教室への通室日を設定した。当該生徒と指導員が適応指導教室で取り組む内容を相談し、学習をはじめ体験活動や教育相談等を実施した。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○目標や方向性1
基本的な生活習慣の改善

○目標や方向性2
基礎学力の定着

○目標や方向性3
豊かな情操・社会性の育成

相談・支援、取組等の状況

- ・ 朝なかなか起きることができない状況にあったことから、規則正しい生活リズムをつくることを目標の一つとした。
- ・ 当該生徒も生活リズムの改善を課題と認識していたことから、遅く起きた場合にも、できる限り休まず通室するよう働きかけた。
- ・ 適応指導教室で取り組む学習や体験活動等の内容は、当該生徒が指導員と相談しながら主体的に決めて実施した。
- ・ 学習については、教科書やワークブックを活用した自学自習を基本に、指導員が当該生徒からの質問に答えるなどしてサポートした。
- ・ 当該生徒の主体的な活動を尊重するとともに、悩みや思いを受け止め、誠実で肯定的な関わりをするよう努めた。
- ・ 他者との会話が楽しめる軽スポーツやゲーム、パズルなど多様な体験活動等も取り入れることにより、人と関わる力を育むとともに、「明日も教室に来たい」と思えるよう、工夫改善に努めた。

《 取組の成果 》

- 主体性を尊重した指導、生徒個々の実態に即した教育相談や学習支援、多様な体験活動等の取組は、すぐに学校への登校意欲につながらないが、適応指導教室では、意欲の高まりが見られ、「学びに向かう力」につながった。
- 心の居場所づくりの取組は当該生徒の心理的な安定をもたらし、自己肯定感や自己有用感、自信が生まれたことにより、当該生徒の心身の状態が好転するなど、学校復帰や将来的な社会的自立に向けて必要となる力を育む一助となった。

発達障がいを抱える生徒への「登校努力」支援

《 概要 》

- 中学校第2学年男子。友人とのトラブルがきっかけで不登校となったが、学習の苦手意識も一因となっている。適応指導教室に入室する前には、市の福祉部が保護者の相談に応じ、学校と連携を図っていた。
- 規則正しい通室や登校機会の拡充を目標とし、学校・家庭と連携を図り、支援を行った。
- 適応指導教室への通室を「生活リズムづくり」及び「学校復帰の意欲付け」と位置付け、学校への登校を再開できるよう支援を行った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○目標や方向性1
試行通室の実施

○目標や方向性2
規則正しい生活リズム
の定着

○目標や方向性3
学校との連携による
登校支援

相談・支援、取組等の状況

- ・ 適応指導教室への入室に向けて、当該生徒の学習活動への意欲を確認すること、予定時間の通室に慣れることをねらいとして、週2回、50分程度の試行通室を設定したことにより、当該生徒は、時間通りに通室し、学習に取り組むことができた。
- ・ 当該生徒は、約3か月間の試行通室期間には、順調に通室していたものの、正式な入室以降は、ゲームやスマートフォンに没入し、昼夜逆転の生活を送るなど、家庭生活の乱れが大きくなっていったことから、規則正しい生活リズムを定着させることをねらいとして取組を行った。
- ・ 学校と連携し、学校行事への参加に向けて、まず、学級活動の時間への登校を試みた。当該生徒の登校への不安感を和らげるため、登校時、指導員が自宅から付き添った。学級担任等の温かい対応や保護者の強い後押しの中、当該生徒は学級活動及び学校行事に参加することができた。

《 取組の成果 》

- 当該生徒は学習に集中できない傾向がみられたが、興味のある教科を中心に、指導員が当該生徒の状態に応じて授業を進めたことにより、定期的に通室できるようになり、知識の定着を図ることができた。
- 当該生徒の意欲と保護者及び学級担任等の当該生徒への積極的な働きかけを支援することにより、学校への登校を実現することができた。登校時に指導員が付き添い、当該生徒の学級や学校行事に対する思いに耳を傾けたことにより、不安感の軽減を図ることができた。